

## 制作概要

今回の研究制作の基調は 1978年ときわ画廊個展（東京）「太陽器」太陽の軌跡を造形することから始まり、1981年不二画廊（大阪）振子の軌跡を造形と、現在の制作内容にいたるまで、方法、素材に変化はあるものの、その通奏低音に拠るところに、自身改めて認識を深める結果になっている。

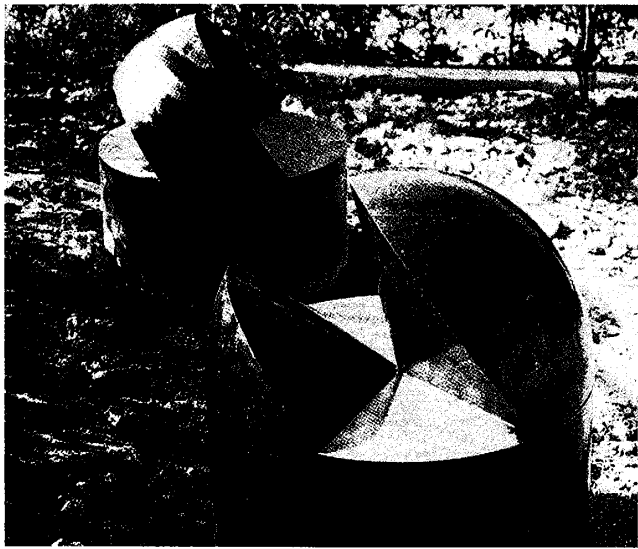
次ページはその経緯を簡単に示そうとしている。

この個展発表では、古い振子時計と百葉箱を組み合わせた造形で、空間を逍遙するためのキャスターを装着し、空間の形態によって変る効果を探索するための装置が二基展示された。この時計は人間的な懐かしい音と、地球の自転を示す格好の装置「フーコーの振子」の宇宙的な両面を備えており、百葉箱は気象（見えない形）を感受する象徴とすることで、環境の動きを組替え、合成し、反応を促し、光は啓蒙（暗きを照らす）し、増幅（共振、共鳴）することによって、既に認知されているかに見えるが、実は可能性に満ちた未知の空間を演出しようとしている。

部屋の空間は青色に満ちていて、部屋の白い部分は振子の後ろのハロゲンライトの黄色っぽい光と合わさっているもので、この部屋では黒い影は実体が壁に近寄った時のみ現れるが、青い影が主役となる、振子の影は人間より大きく拡大され、正面の壁と側面の壁で速度を変えることになる。

さて、ここでは全ての内容を説明することは限界があるので、この写真表現を参考いただいて、つぎの発表にその役割を譲りたい。

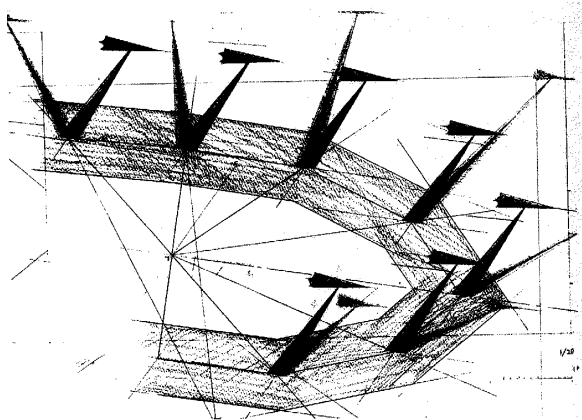
北野 正治  
「光 振子」  
北野正治個展  
信濃橋画廊(大阪)



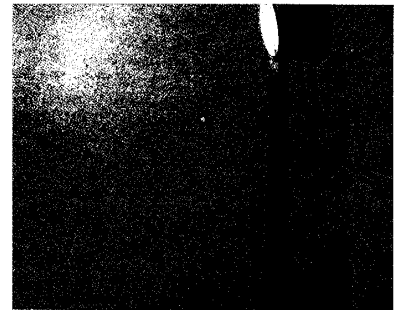
「太陽機」  
太陽の運行奇跡を表現  
ボイドとマスの認識  
実験  
1973年(ときわ画廊個展/東京)



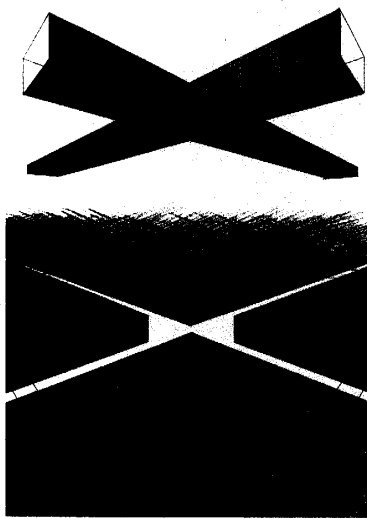
振子の奇跡を造形  
1981年(不二画廊/大阪)



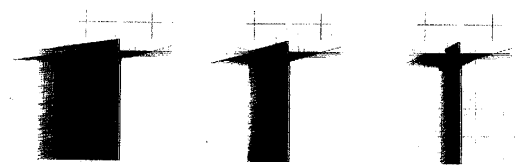
移動光源によって一つの影が他の影を追い抜くように計画している。  
(茶屋町画廊)



移動光源としてのハロゲンライト  
平行移動変速装置付き

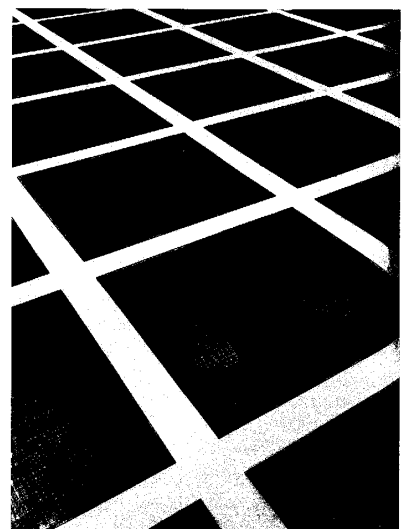


光源の移動と光源との  
角度による表現  
1995年(ABCギャラリー/大阪)



Strolling About Town Amid the Light  
Masaharu Kitano

街の条理的空間をボイド  
とマスの関係の中で認  
識するためのデッサン



街の条理的空間を地上と  
地下の形態の関係の中で  
認識するためのデッサン

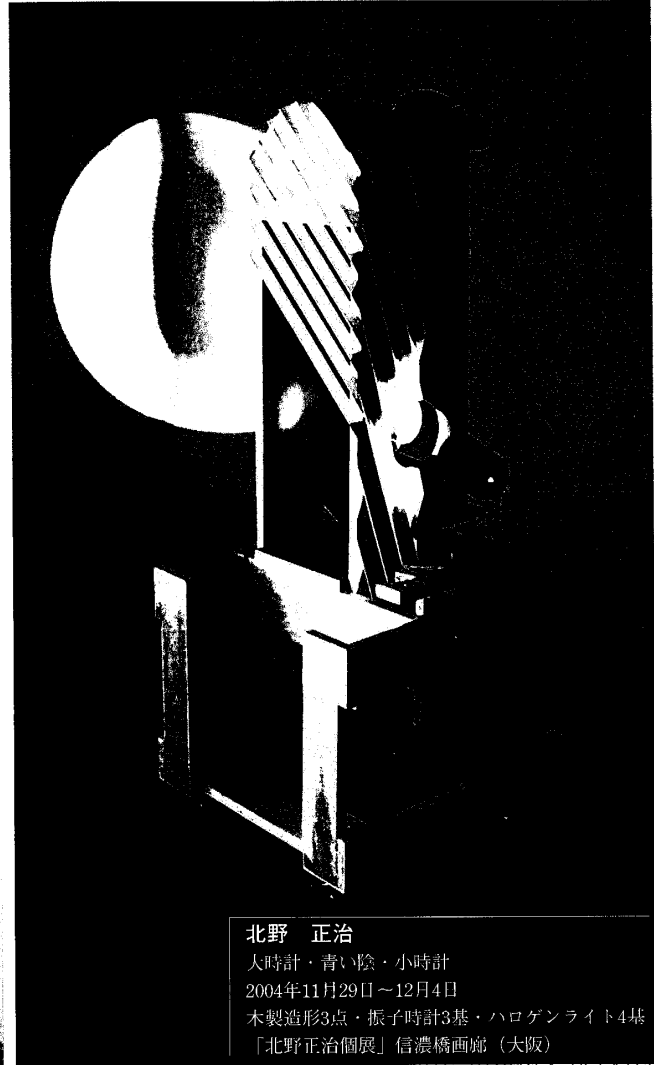
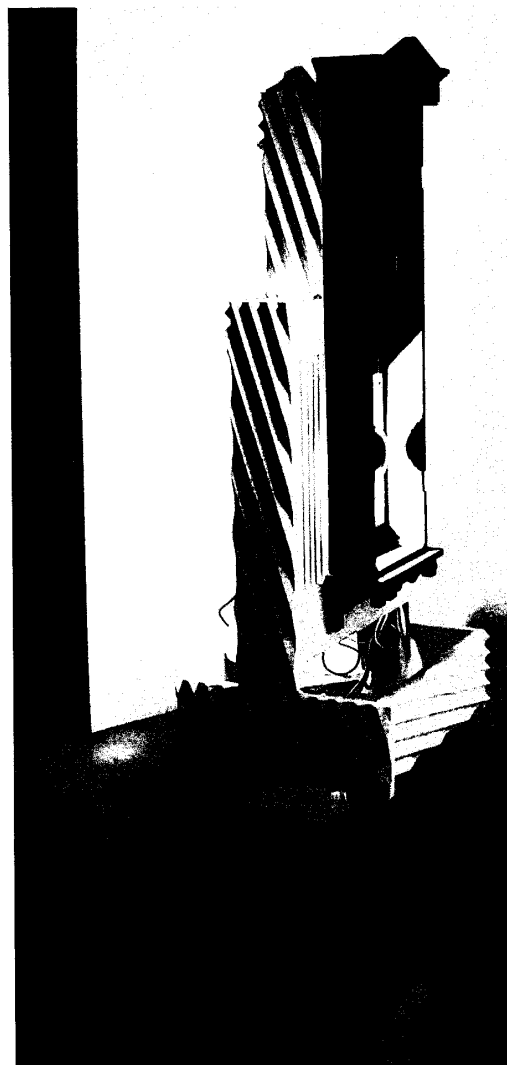


光の三原色を基に、光のもつメッセージについて研究するための模型





側壁／正面壁／床／振子の影／百葉箱／青い空間／青い影／白い光



北野 正治

大時計・青い陰・小時計

2004年11月29日～12月4日

木製造形3点・振り時計3基・ハロゲンライト4基  
「北野正治個展」信濃橋画廊（大阪）